

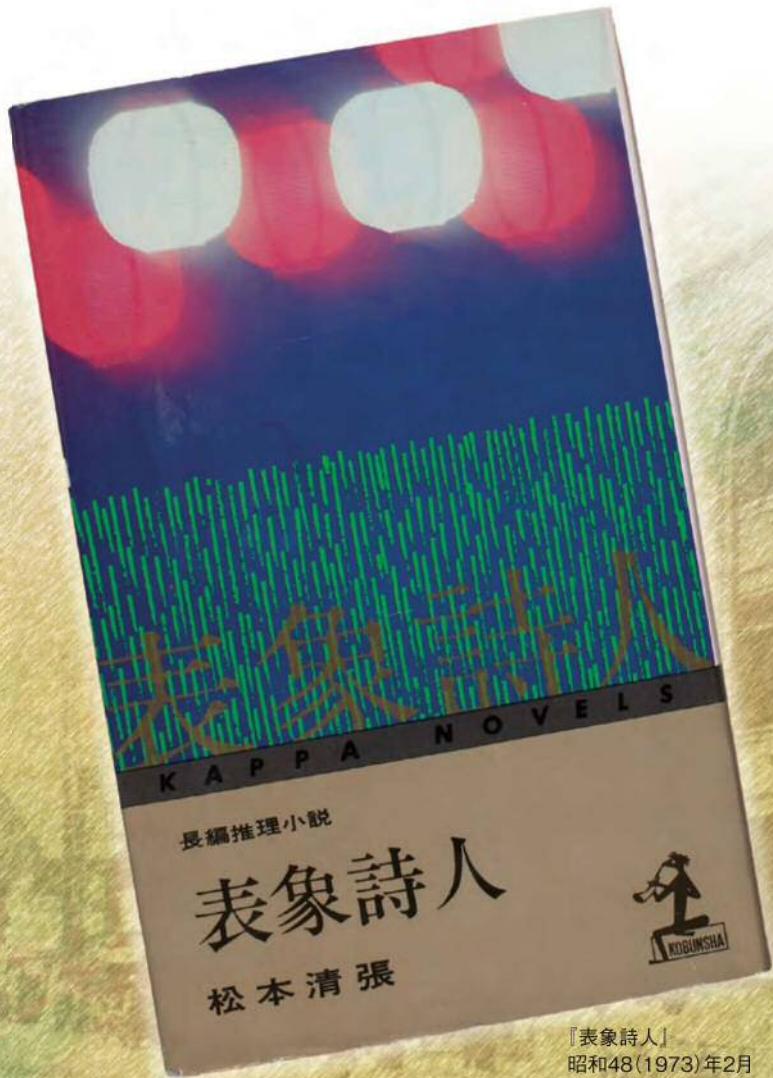
# 松本清張記念館

◆館報◆  
2013.12  
第44号

「表象詩人」は、昭和四十七（一九七二）年七月二十一日から同年十一月三日まで「週刊朝日」に連載された。

どこもが静かな風景で泛び上がつてくる。

あのころの小倉の街を想い出すと、



『表象詩人』  
昭和48(1973)年2月  
カッパノベルス

現在入手できる本  
『松本清張全集』第39巻 文藝春秋

## 目次

- 市制50周年・開館15周年記念
- 「横山秀夫 講演会」
- 特別企画展「北九州市と松本清張」
- 展示品紹介
- 点描作品の舞台を訪ねて
- 特別企画展報告「松本清張と邪馬台国」
- 友の会活動報告
- トピックス

（専門学芸員 柳原 晴子）

## 作品紹介

小倉市で私鉄の駅員をしている「わたし」は、市内の陶器会社に勤務する久間英太郎と秋島明治とともに、同社の技師・深田弘雄のもとへ通い、詩論を交わす。女性である深田の妻・明子は、密かに憧れの対象であった。

ある夏の日、木町で盆踊りがあった時に、明子が絞殺された。「わたし」を始め何人かに容疑がかかたが、久間と秋島への取り調べは特に入念に行われた。結局、犯人は捕まらず、事件は迷宮入りし、夫の深田も、久間と秋島も、陶器会社を去った。

四十年後、「わたし」は偶然から秋島と再会する機会を得る。長年の疑惑に対しそこで秋島から語られた内容は、驚くべきものだった。

本作は、清張自身の青春時代が色濃く反映された作品である。北原白秋や、野口米次郎、タゴールの詩について、文学的回憶録のような趣がある。また、昭和初期の小倉の街並みが随所に描き出されており、「木町」「篠崎」「堺町」「紺屋町」などの町名や位置は、今もさほど変わらない。ここにも、故郷を懐かしむ作家の姿が感じられる。

## 横山秀夫講演会

## 清張さんの呪縛

—清張賞作家として生きるということ—

●平成25年8月4日(日) ●北九州市立男女共同参画センター・ムーブ ●参加者 約500名



いまや警察小説の大御所として人気を博す、作家 横山秀夫さん。

世に出られたきっかけは「松本清張賞」でした。

担当編集者として信頼の厚い武田昇さんが聞き手となり、時折笑いも誘いながら、忌憚なく語られた創作への想い。その要旨を紹介します。

## 清張さんの「呪縛」とは

横山秀夫でございます。本日はよろしくお願いいたします。(横山)

よろしくお願いします。横山さん、まず「清張さんの呪縛」という演題ですが。(武田)

凄いタイトルですね。誰が考えたんですかね。

あの、横山さんです。

僕でしたか?(笑) そうですね、「呪縛」というとオーバーかもしれないけれど、冠に人の名前が付いている賞は応募するときから気持ちが違いますし、後も引きするものがあるんですね。たとえば江戸川乱歩さんほど古い方ですと銅像のようになりますけど、松本清張さんは作品はもちろん、ご本人が今も存命されているかのように読者の心の中に色濃く生きている、そういう意味で生々しい賞でした。受賞後もいい加減なものを書いて

いたり泥を塗つてはならないとか、身の引き締まる思いがするわけです。執筆の際はある種ケレンの誘惑を感じながら書く訳ですが、「清張さんであれば、ここは強引い言葉や派手な言葉は使わない。普通の言葉で、人の深いところに達する方法を見いだしている」とか、常々そういうことを考えながら書いています。

▼ 清張さんは九二年に亡くなられて今日が命日ですね。九四年に「松本清張賞」ができまして、横山さんは九八年に受賞されています。ところで、横山さんが清張さんの作品と触れ合ったきっかけは。

中学・高校のころ、父親の本棚の「ゼロの焦点」や「眼の壁」から読みはじめました。

印象的な清張さんの作品は数え切れないです。わたしは書く方も読む方も長編より短編が好きなのですが、長編ならば「小説帝銀事件」を挙げたいです。様々な人間の葛藤を描いた作品群とは一線を画していく、これはまさしくドキュメント小説です。中学から高校ぐらいに下山事件や帝銀事件といった事件に執着心が芽生え、母方の実家が神田の古本屋街に近かつたこともあり、その種の関連本を買いつつ、いついた時期がありました。

犯人は平沢にあらずという本はいくらもあるんですが、子どもながらに何か結論に読者をひきずり込むような作為を感じ取ったんですね。けれ

めました。系統だつてではなく、本棚の左から右まであるもの全部という読み方をしていました。いろんな清張さんの作品が、ボディーブロー(※)のように自分の中に効いてきたと作家になつて感じます。

※ボクシングで腹部を打つこと。

## 横山少年と「小説帝銀事件」との出会い



▼ 「小説帝銀事件」は雑誌「文藝春秋」に掲載され、その年最も面白かった記事を決める読者賞を取っている作品ですね。子ども時代のお話をもう少し伺うことができますか。

小学校の時はいじめっこのようないふを言っていたんですね。友達の家の前で「あそびましょ」と呼ぶでしょう、するといつも「あー」と一でと、本人じゃなくお母さんが言つていらんですね。(笑) それで仕方なく、学校の図書室に行くようになりました。

記者時代に読み返しても凄いなと思いましたね。ここに持つて来たのが昭和三年の初版本で、二四〇ページほどですが、あの複雑怪奇な帝銀事件のキモが浮彫にされ、あらゆる正と否が対比して書かれています。ジャーナリズム的にも小説家としてみても、咀嚼力というか、何を切って何を残しどう繋げるかという点が精密な機械のようだと感服します。

シャーロック・ホームズから始まってミステリー、ジュール・ヴエルヌなどのSF、世界や日本の文学全集まで、片つ端から読みました。自分のファイルがまだ綺麗な時に吸収したんですね。いま「物語はかくあるべき」とか、「こういった物語にはこういった展開やエピソードが必要」といったことを直感的に選ぶのは、当時の読書体験が根底にあると思いますね。

物語の終わり方が許せなかつたり、もつと読みたかったのにという時は、続編を書いて学校に持つて行って友達に読ませていました。そうすると、先生に「友達に無理矢理読ませては

いけません」と怒られ、ますます孤立する、そういう悪循環でしたね。(笑)

▼ 帝銀事件や下山事件に興味を持たれときつかけは。

変質者だったんでしょうね。(笑)謎を含んだ大きな事件に対して、ぶるぶる震えが来るような子どもだったんですね。今でも「わからないこと・隠されていることが明らかになること」が私にとって唯一のミステリーの定義です。

## 敏腕事件記者から小説家組織と個人のせめぎあい

### 横山秀夫 (よこやま ひでお)

昭和32年東京都生まれ。

新聞記者、フリーライターを経て、平成10年「陰の季節」で第5回松本清張賞を受賞。平成12年「動機」で第53回日本推理作家協会賞・短編部門を受賞。

著書に「半落ち」「顔 FACE」「深追い」「第三の時効」「真相」「クライマーズ・ハイ」「影踏み」「看守眼」「臨場」「出口のない海」「震度0」などがある。最新作「64(ロクヨン)」は、週刊文春ミステリーベスト10位などを獲得している。

は事件記者をやるために生まれてきました男みたいなことを言われ続けていましたよ。

▼

記者時代は小説よりノンフィク

ションを読むことが多かつたです。嘘やあいまいなことを書いてはならぬ世界にいましたから、若い記者が原稿に洒落た修飾語なんか使っていると「お前は小説家か?」みたいなね。だから小説を書いてサントリーミステリー大賞の最終選考に残ったとかつたとき、周囲は驚きましたね。

けじめを付けるべく、すぐには辞表

を書きました。大賞まちがいなしまたいな話も聞いていたし、上司は「結果が出るまで待て」と言つたなんだけれど、待たずにはね。ところが蓋を開けたら大賞どころか読者賞もだめ。本にしてもらえれば一つくらいは仕事が来ることだらうと思っていたんですけど。あのときは真っ青になりましたね。

▼ それから七年後の「陰の季節」は、松本清張さんの冠の賞ということを意識して書かれたのですか。

記者は天職だと思っていた時期が確かにありました。子どもの頃から文章を書いていたし、論文募集みたいなものに出せば入選するし、事件好きだし。辞めるまでの一二年間、周囲から

めぎあい」をテーマにしていますが、「陰の季節」で初めてそういう作品を書きました。組織を出て肩書きのない個人として七年間生きてみて、「実は組織とはこういうものだったんじゃないか」と新たな視点を持つようになりました。清張さんという冠に刺激され、誘われ「組織と個人」というテーマを決断したのだと思います。このテーマは古今東西あるのでしょうか、自分なりに実感として染み出すように書けた。今も書き続けているということは、まさしく染み出たものなんだ

ろうと思います。

## 記者時代の経験が活かされていますか。

そうですね。勿論二年間の記者経験が役立っていることは確かです。仕事を誇りを持っていましたから、辞めることには葛藤もありました。でも、小川をびょんと跨いだのではなくて、流域も深さもある大きな川を渡つてジャーナリズムからノンフィクションの世界に身を投じた自負があるので、ジャーナリズム系の作家と言われることに戸惑いというか、不思議に感じることすらあるんですよね。

嘘を書けない世界にいましたから、たとえば今回の「64(ロクヨン)」で一行目に「夕闇に風花が舞っていた」と書

## ノンフィクションを凌駕する ノンフィクション

### 武田昇 (たけだ のほる)

文藝春秋「オール讀物」副編集長。平成15年「クライマーズ・ハイ」より、横山氏の担当をつとめる。

くようなとき、いま見ているわけでもなく過去に見たかどうかわからぬのに、そういう書き出しをするといふこと、つまり虚構の物語を作ることに対する罪悪感が沸き上がります。だからこそ、物語がノンフィクションになつた。清張さんという冠に刺激され、誘われ「組織と個人」というテーマを決断したのだと思います。この

いのであれば書く意味がないと思いませんが執筆しています。

▼ 帝銀事件や下山事件に興味を持たれときつかけは。

変質者だったんでしょうね。(笑)謎を含んだ大きな事件に対して、ぶるぶる震えが来るような子どもだったんですね。今でも「わからないこと・隠されていることが明らかになること」が私に

とつて唯一のミステリーの定義です。

うが人の心に近く、武器としても強いのではないかと思ってこの世界に転じたわけです。

▼ 横山さんは日航機事故（昭和六〇年）当時に記者として取材されていますが、「クライマーズ・ハイ」では現場の描写は殆ど書かれていません。事故から一八年という年月に色々考えた末にそういう形に行き着かれたのでしょうか。

記者を辞めて生活に窮していたころ、日航機事故のノンフィクションを書いてほしいという依頼があり、これで本を出せるかと一度は実際に書き出したりもしたんですよ。結局筆が止まりました。

「クライマーズ・ハイ」はノンフィクションに近いと思われているかもしれません。けれど事故の事実関係以外はほぼ私が創作したエピソードなんですよ。地方メディアの葛藤やマスクを、事実ではなく真実の視点で描きたかった。本のキャッチコピーの「記憶でも記録でもないものを書くために一八年かかった」というのは、そういう意味だったんですよね。

▼ 取材についての質問も多いかと思います。

編集者には何を取材するか言わないし、一緒に取材旅行もしません。たとえば武田さんのことは好きだけど、編集者は一応敵と見なしています。（笑）どんな商品であれ品質試験を突破しなければ、世の中に出ないわけじゃないですか。本だって同じです。関所を突破したもののが書店に並んでいるという信頼感を読者の方に持つてもらわないと、ますます紙媒体は衰退すると危惧しています。取材して書くまでは作家の責任においてやることと一緒に取材することを否定する訳ではないけれど、私は分業にして馴れ合いを排したい。そうすることできました。



来場者からの質問にも快く応じていただきました。

まりましたが、自分の浅ましさが恐ろしくもあり、間違ってもお金に困つているときや世の中に出ていないときには書かない誓いました。作家としてデビューして、仕事が安定てきてから、どう書くか本気で考え始めました。「クライマーズ・ハイ」を出せるようになるまでに一八年かかったということですね。

▼ 普段から「編集者が関所だ」とおっしゃっていますね。

者は、作家から原稿を受け取った時に、突き返すか、没にするか、通すかで決まりますよ。（会場拍手）

最初に「短編が好き」とおっしゃいましたが、清張さんの短編小説をどう捉えていらっしゃいますか。

長編小説も短編小説も人生の一部をそばっと切り取っているという点では同じです。たとえ何千枚書いても人生の全部にはなりえないという意味です。ならば短編のほうが潔いではないか、落とし落とし削りに削つて、ある一面を際立たせることこそが本来の小説ではないかと思うことが多いんですね。

▼ ここで皆さんにひとつお伝えしたいのですが、宮部みゆきさんが責任編集をされた「松本清張傑作短編コレクション」（文春文庫平成二六年）には、松本清張賞作家の方が好きな短編をひとつ選んで書いたエッセイを掲載しています。横山さんは「『地方紙を買う女』もどきを書いてみる」という作品を書いてくださったのですが、これがエッセイでもあり短編小説にもなつて驚きました。非常に時間と労力をかけていた大いに申し訳ないと思つたぐらいです。本当に面白いので、未読の方があたらぜひ読んでいただきたいです。

わたしは作家のかたとほとんどおつきあいがないんですが、宮部みゆきさんはすごく好きで尊敬もしていまして、このときは宮部さんが責任編集ということで、簡単に言うと張り切つた訳です。（笑）ただのエッセイでは気が済まなくて小説一本書いちやいました。宮部さんも「（収録されている）下巻が一番売れた」と言つてくださいました。辛い時期に声をかけていただきたい

たことがあって、どうにかお返しがしたかった。そんなわけですから面白いに決まっていますよ。（会場拍手）

最初に「短編が好き」とおっしゃいましたが、清張さんの短編小説をどう捉えていらっしゃいますか。

長編小説も短編小説も人生の一部をそばっと切り取っているという点では同じです。たとえ何千枚書いても人生の全部にはなりえないという意味です。ならば短編のほうが潔いではないか、落とし落とし削つて、ある一面を際立たせることこそが本来の小説ではないかと思うことが多いんですね。

清張さんの短編は切れ味が鋭いのに、淡淡と書かれています。多くの作家は、とりわけミステリーを取り入れる作家はキモを強調して書いてしまって、ある一面を際立たせるところこそが本来の小説ではないかと思うことが多いんですね。

清張さんの短編は切れ味が鋭いのに、淡淡と書かれています。多くの作家は、とりわけミステリーを取り入れる作家はキモを強調して書いてしまって、ある一面を際立たせるところこそが本来の小説ではないかと思うことが多いんですね。

わたしは作家のかたとほとんどおつきあいがないんですが、宮部みゆきさんはすごく好きで尊敬もしていまして、このときは宮部さんが責任編集ということで、簡単に言うと張り切つた訳です。（笑）ただのエッセイでは気が済まなくて小説一本書いちやいました。宮部さんも「（収録されている）下巻が一番売れた」と言つてくださいました。辛い時期に声をかけていただきたい

# 松本清張と北九州市 清張文学の原点

市制50周年 開館15周年記念特別企画展

五市合併以前の小倉市に、松本清張は育ちました。しかし、北九州市は以前から、清張にとってひとつの郷土です。

清張は、上京後もふるさと北九州市と関わりを持ち続けました。本展では、市制50周年並びに開館15周年を記念して、松本清張と北九州市との絆をご紹介します。

開催期間 平成26年1月18日(土)~3月31日(月) 場所 松本清張記念館地階 企画展示室

入場料 一般 500円 中高生 300円 小学生 200円

※常設展示観覧料に含む

## I 思い出の中の小倉—少年期

清張が小学校時代を過ごした頃の小倉は、「或る『小倉日記』伝」の情景にも通じる、静かな城下町の風情を残した街でした。その一方で、軍都として、生産工業の拠点として、発展してゆく北九州の姿があります。



大正11年 天神島小学校  
卒業時の松本清張  
北九州市立小倉中央小学校所蔵

## II 翼を広げて—青年期

中学校進学が叶わなかった清張は、東洋陶器や八幡製鐵の職工たちと、文学を論じ合う仲間になります。また、演劇や映画が北九州各地で上演・上映されたこの頃、清張も足をはこび、観劇したのではないでしょか。



『近代思想十六講』  
(大正4年12月 新潮社)  
清張旧蔵

## III この地に根を張り—壮年期

清張は、画工として独立したことを契機に、朝日新聞入社へのチャンスを掴みます。所帯を持つと、家長としての責任からますます仕事に没頭することになりました。戦後は、商業デザイナーとして研鑽を積む一方で、小倉郷土会の人たちや、岩下俊作、火野葦平らとも交際を始めます。



昭和27年  
清張デザイン  
「古代生活資料展」ポスター

## IV 遙かな故郷—上京以後

「西郷札」入選、「或る『小倉日記』伝」の芥川賞受賞により、作家としての道を歩き始めた清張は、朝日新聞東京本社への転勤を経て、専業作家となりました。東京での活躍は、旧知の者にとっては、清張が遠く感じられるような飛躍でした。しかし清張は、事ある毎に故郷・北九州市に戻り、厚情を示しています。

昭和50年 清張自筆の北九州市立  
中央図書館著書寄贈目録  
北九州市立中央図書館所蔵



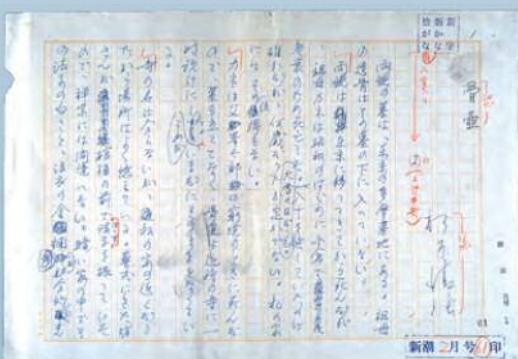
昭和52年 北九州青年会議所 創立25周年記念講演会

## V 清張文学の原点として—没後

平成4年、松本清張は亡くなりました。

北九州市では、清張を故郷に迎え記念館を作りたいという機運が高まり、平成10年には「北九州市立松本清張記念館」が開館しました。以来、様々な研究や普及事業が実り、国内外から注目され多くの人々が来館しています。

ここ北九州市は、清張文学の原点(ふるさと)なのです。



昭和55年「骨壺の風景」原稿

## 展示品紹介

# ガンダーラ仏



(写真4)



(写真2)

単独仏などを合わせて、松本清張はガンダーラ仏を十九体所蔵していた。

「銅鼓とガンダーラ仏」（『芸術新潮』昭和五十年七月）に、「火の路」（朝日新聞 昭和四十八年六月～四十九年十月）執筆中に、偶然の機縁で骨董屋から数個手に入れたとある。同作で、清張は「中国に入ったときの仏教は、インド仏教と西方宗教である太陽信仰との混血という考え方」を書いたが、その混血が

興味深い」と感じ、購入したようである。

出口に向う通路の左手、再現家屋の一部にガラス張りの部屋がある。「資料室」（写真2）である。正面のガラスケースには、横長い仏伝図のプレートが三つのはか、最下段に縦長のチャイティヤ（仏塔を本尊として祀る祠堂）。

乞うご期待。

（学芸担当主任 中川里志）

第二展示室の階段を上がってすぐ左のケースの中に、**ガンダーラ仏の頭部**（写真1）がござられて

いる。正面から見ると、小さめの口もと

の両端に窪みがあり、かすかに微笑みを湛えて見える。瞑想ふうの眼と豊頬の仏陀の表情には、静けさと優しさがうかぶ。四世紀以降、

ストゥッコ（石灰を用いた漆喰）像である。

仏伝図（今生における釈尊の生涯・伝説）の浮彫や

ラム（『火の路』（朝日新聞 昭和五十年七月）に、「火の路」（朝

日新聞）昭和四十八年六月～四十九年十月）執筆中に、偶然の機縁で骨董屋から数個手に入れたとある。同作で、清張は「中国に入ったときの仏教は、インド仏教と西方宗教である太陽信仰との混血という考え方」を書いたが、その混血が

興味深い」と感じ、購入したようである。

**アーチ形の浮彫**（写真3）が置かれている。この破風型パネルの浮彫は上下三段に仕切られ、仏伝を表す。離れてるので注視してほしいが、頂部は削損がはげしく仏陀

(写真3)

の顔も判然としない。ただ手首から先のないその右手は下がり、触地印を結んでいるかと想像されること、ペシャワル博物館蔵のタフティバーリー出土の浮彫の頂部（天平久）がこれと似ていることから、この最上段は「降魔成道」の場面ではないかと推察される。二段目は、台座にきまりの法輪と二鹿はないが、施無畏印を結ぶ仏陀と、説法を聞く五人の比丘を配している、「初転法輪」の場面だろう。

そして、最下段は仏陀を中心にして両側に合掌する人物を配しているが、未比定の場面である。清張はこれを「瞑想中の釈迦を女人が開む（誘惑）の場面と解釈し、頂部を「成仏」の場面としたため、物語は普通の仏伝図とは逆に〈下から上〉になっていると、前記のエッセイでは書いている。

左の幅狭いケース側面の奥を覗き込むと、遠くに、**菩薩立像**（写真4）の横顔が小さく見える。（東京国立博物館に陳列されてある（当時）二体のガンダーラ仏と同系統）のもので、ヘリニスティック仏教美術の典型であると、清張は書いている。その面貌は「まったくギリシャ人の顔」で興味をひく。

近い将来、じっくり見ていたく機会を作りたい。

## 作品の舞台を訪ねて 「顔」「球形の荒野」—京都いもぼう(2)



円山公園

少し腹が空いた。何を食べようかと考えた。京都に来たのだから、東京で食べないものを食おうか。それでは、いもぼうにでもしようと思った。電車を八坂神社の前で降りて、円山公園の方に上つてゆく。（略）部屋に通されて、運ばれたいもぼうをたべる。（略）女中は三人連れの客と一緒に詰めさせてくれ、といつた。いいよ、とぼくはうなづいた。三人の客が入つて

きた。（略）正面の石岡貞三郎が静かにぼくの方を見た。

（文藝春秋『松本清張全集36』より）

「顔」という小説は、井野良吉と石岡貞三郎、それぞれの視点から交互に描かれる構成となっている。読者は、両者が相席となってしまう場面に近づくと、思わず引き込まれてしまう。その舞台が、「いもぼう」の店である。

円山公園内で「いもぼう」を供する店は二軒あり、いずれも川端康成や吉川英治ら文豪に愛されたとして知られている（「平野家本家」「平野家本店」公

式ホームページ参照）。次号では、「いもぼう」が登場するもう一つの作品「球形の荒野」の舞台について記す。

（加地尚子）

北九州市制50周年・記念館開館15周年記念特別企画展

# 松本清張と邪馬台国

## —『魏志』「東夷伝」倭人条の謎に挑む

開催期間中、多くの清張や邪馬台国のファンが来館され、8,500人を超える方々が観覧されました。

開催しました

■8月1日(木)→11月4日(月・休)  
■松本清張記念館 企画展示室

清張の邪馬台国研究の全体像がうまくまとめられています。清張と他の学者との対立点がわかりやすく展示されています。(アンケート)



ありがとうございました。魂に触れました。(アンケート)

私たち素人には難解な清張古代史を年代順、課題順、論争点などで整理され、簡潔に展示されていることに感激! 又、清張さんの古代史への並々ならぬ執念(!!)・強韌な精神とその持続力にふれることができました。企画展を観て、心が動きました。これを手引きとして、未踏の清張古代史へ一步踏み込む勇気と知的エネルギーを満タンにしてくれた企画展でした。(友の会会員Y生)



「古代史疑」関連資料

邪馬台国と松本清張の関係を初めて知ったが、コレクションがすごいと思った。(アンケート)



清張コレクション(銅鏡・古錢など)



安心院町の皆さん

素晴らしい企画展でした。清張の古代史にひたる事が出来た。又、1冊900円の企画展のパンフレットも非常によく出来ていた。内容もていねいでしく出来ていた。(アンケート)



図録は、記念館及び通信販売で販売中

## 友の会活動報告

### ● 平成25年度年次総会・懇親会

8月4日(日) 参加者52名

北九州市立男女共同参画センター・ムーブ 5階

横山秀夫講演会の後、平成25年度友の会年次総会が開催されました。前年度の事業報告・決算、幹事選任、新年度の事業計画・予算の審議が行われ、拍手をもって承認されました。総会終了後の懇親会は、会場を松本清張記念館地階ホールに移して盛大に行われました。横山秀夫様も特別参加され、会員向けて特別にサイン会をして頂き、皆様大変感激していました。小林慎也会長や藤井康栄館長の挨拶をはじめ、遠方からの参加者のスピーチなども行われ、和やかな懇親会となりました。

### ● 清張サロン | 記念館 地階会議室

平成25年度の第1回清張サロンは、特別企画展「松本清張と邪馬台国」をテーマに、第2回清張サロンは、特別企画展に関連して「陸行水行」をテーマに講師にお話していただきました。清張サロンならではの詳細な資料を準備していただき、大変有意義で充実した清張サロンとなりました。

第1回 9月20日(金) 14:00~16:00 参加者25名

- テーマ 特別企画展「松本清張と邪馬台国」
- 講師 中川 里志氏(記念館学芸担当主任)

第2回 10月25日(金) 14:00~16:00 参加者23名

- テーマ 「陸行水行」
- 講師 小林 慎也氏(元・梅光学院大学教授、友の会会長)

### ● 文学散歩「清張古代史」伊都国、末盧国等を訪ねて

11月1日(金) 参加者44名

伊都国歴史博物館→名護屋城博物館→名護屋城跡→旧高取邸→鏡山

今回は「糸島市・唐津市」を訪ねました。清張が小説のモデルに書きたかった「原田大六」氏ゆかりの伊都国歴史博物館では、世界最大の国宝「内行花文鏡(銅鏡)」や国宝「ガラス勾玉」などを鑑賞。名護屋城博物館では企画展「秀吉の宇宙」を見学し、復元された「黄金の茶室」や「茶の湯」などを間近で見る事ができ、また、旧高取邸では見事な「杉戸絵」や「能舞台」に驚嘆させられました。各施設では解説員や学芸員から詳しい説明を受け、最後は清張も訪れた「鏡山」から夕暮れの唐津湾や虹の松原を眺め、清張古代史への思いを巡らせました。今回も、遠方から沢山の方にご参加頂き、会員同士の会話をもはずみ楽しい1日となりました。多くの参加者から「盛りだくさんの内容で良かった」「次回の文学散歩が楽しみ」などの声を頂きました。



### ● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日～翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。

年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしています。

友の会入会のお申し込みは、松本清張記念館友の会事務局まで

TEL. 093-582-2761

第15回

## 入館者120万人達成！

平成25年9月13日(金)、記念館の入館者が120万人に達しました。120万人目の入館者は山口県下関市の萩原佐和子さんで、お友達に連れられて、初めて入館されたとのことでした。

萩原佐和子さんには、認定書と記念品が贈られました。



(左)福永 義臣氏 (右)久米 雅雄氏

平成25年8月4日(日)、第15回松本清張研究奨励事業奨励金贈呈式が行われました。入選者は次のとおりです。

### 研究奨励事業入選者

**企画名** 松本清張「火の路」と漢魏晋以来「胡印」及び「景教印」等の研究  
—印章の世界にペルシャ文化とその東漸をよむ—

**入選者** 久米 雅雄(大阪芸術大学客員教授)

**企画名** 松本清張の研究  
—「回想的自叙伝」を中心に、社会教育・自己教育の視点から—

**入選者** 福永 義臣(元・九州国際大学教授)

# 松本清張研究奨励事業

## 当館の柳原専門学芸員が講師を務める



平成25年10月16日(水)、午前10時から2時間、小倉みなみ市民塾「わがまち講演会」で柳原専門学芸員が「松本清張『黒地の絵』—キャンプ城野・黒人兵集団脱走事件—」と題して講演を行いました。

約70名が聴講、熱心にメモをとる姿もみられ、会場は熱気に包まれました。



●編集後記● 2013年が暮れようとしています。今年多くの皆様にご来場いただきまして、有難うございました。

今後も清張の研究拠点として充実した活動に努めてまいります。まずは、初春開催の特別企画展「北九州市と松本清張」で、北九州市制50周年・開館15周年記念事業を締め括ります。その後も多彩な事業を計画中。来年も清張記念館にご期待ください。  
(N.K.)



イラスト:山藤 章二

編集・発行

**松本清張記念館**  
〒803-0813  
北九州市小倉北区城内2番3号  
TEL 093(582)2761  
FAX 093(562)2303  
<http://www.kid.ne.jp/seicho>  
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般／500円(400円) 中・高生／300円(240円)  
小学生／200円(160円) ( )は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分  
小倉駅からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)  
車: 北九州市高速、大手町ランプより5分

## 第16回 松本清張研究奨励事業募集

### 募集要項

**対象** ①松本清張の作品や人物を研究する活動  
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)  
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。

**内容** 入選者(団体)に150万円を上限とする研究奨励金を支給します。

**応募方法** 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成26年3月31日までに応募してください。

※詳しくは、ホームページをご覧になるか、記念館までお問い合わせください。

